

# 大 浦 遺 跡 調 査 報 告 書

青森市の埋蔵文化財7

## 大浦遺跡調査報告書

### 目次

序	2
はじめに	3
遺跡の位置	5
調査経過	5
遺構について	7
写真図版	9

## 序

文化財保護法が、先人の貴重な遺産である文化財を保存し、その活用を図り、国民の文化的向上に資するとともに世界文化の進歩に貢献することを目的として、昭和25年に制定されて以来20有余年経過してまいりました。その間我が国に於ける文化財保護のための諸事業は飛躍的な発展をとげてきたことは誠に喜ばしい限りであります。

しかし、その反面近年のめざましい開発事業の発達に伴ないあらゆる方面から文化財に対する危機がさげばれてきております。

現代に生きるわれわれはかけがえのない文化財を永く後世に伝え保存するとともに、これを活用して文化の創造発展に役立てることを責務としなければなりません。

当教育委員会ではこれまでも市内に散在している古代の遺跡の発掘調査をして、その遺物を保存するとともにこれが記録を作成して、文化財保護と研究の資料の一助としてまいりました。

昭和46年度においても青森市文化財審議会および研究者や市内の高校生の協力を得て、大浦適跡の発掘調査をおこないましたが、このたびその結果の報告書を刊行するはこびとなりました。

十分な成果をあげることはできませんでしたが、この小冊子が広く関係者の用に供されいささかでも文化財に対する正しい理解と関心を深めることに役立てば幸いです。

昭和46年3月

青 森 市 教 育 委 員 会  
教 育 長 杉 田 貞 作

## はじめに

青森市には現在、知られている遺跡は72ヶ所以上にのぼるが貝塚として記録にあるのは、東岳(684m)<sup>(1)</sup>北東山ろくの洪積台地上に位置する縄文時代晩期の長森遺跡(全国遺跡地図青森県663)があったという過去の記述にとどまる。

海を囲む当市でありながら漁撈との直接的つながりを示す縄文時代の遺跡は、ここ大浦遺跡より他に見出せない。(青森市のみでなく陸奥湾をのぞむ近隣市町村に於いても少ない)ただ、むつ市に古くから発見されている女館、最花があり、時期の異なる大浦遺跡の性格には、はなはだ興味があった。

本遺跡は1967年慶応大学の江坂輝弥氏と青森市久栗坂山野峠遺跡(積石塚石棺墓)発掘の際、見学に来ていた青森商業高校の生徒より聞きおよんで、翌年弘前大学の村越潔氏と共に発掘されたが、まだその報告書は出されておらず、ただ「考古学ジャーナル31」(1969)にその結果の一部についてふれているにすぎない。

また当市の考古資料蒐集家として名高い大高興氏は大浦出土の骨角器を相当数所持している点からみても一部の民衆や、地元の人たちには戦後も間もない頃から知られているようだ。

なお、この貝塚より南西50m離れた畑地一帯は、北林八州晴氏の指摘になる白砂式土器(仮称)<sup>(4)</sup>が多数散布し、岡山大学の近藤義郎教授も遺物、遺跡も実見して製塩址であるとの確証を得た。

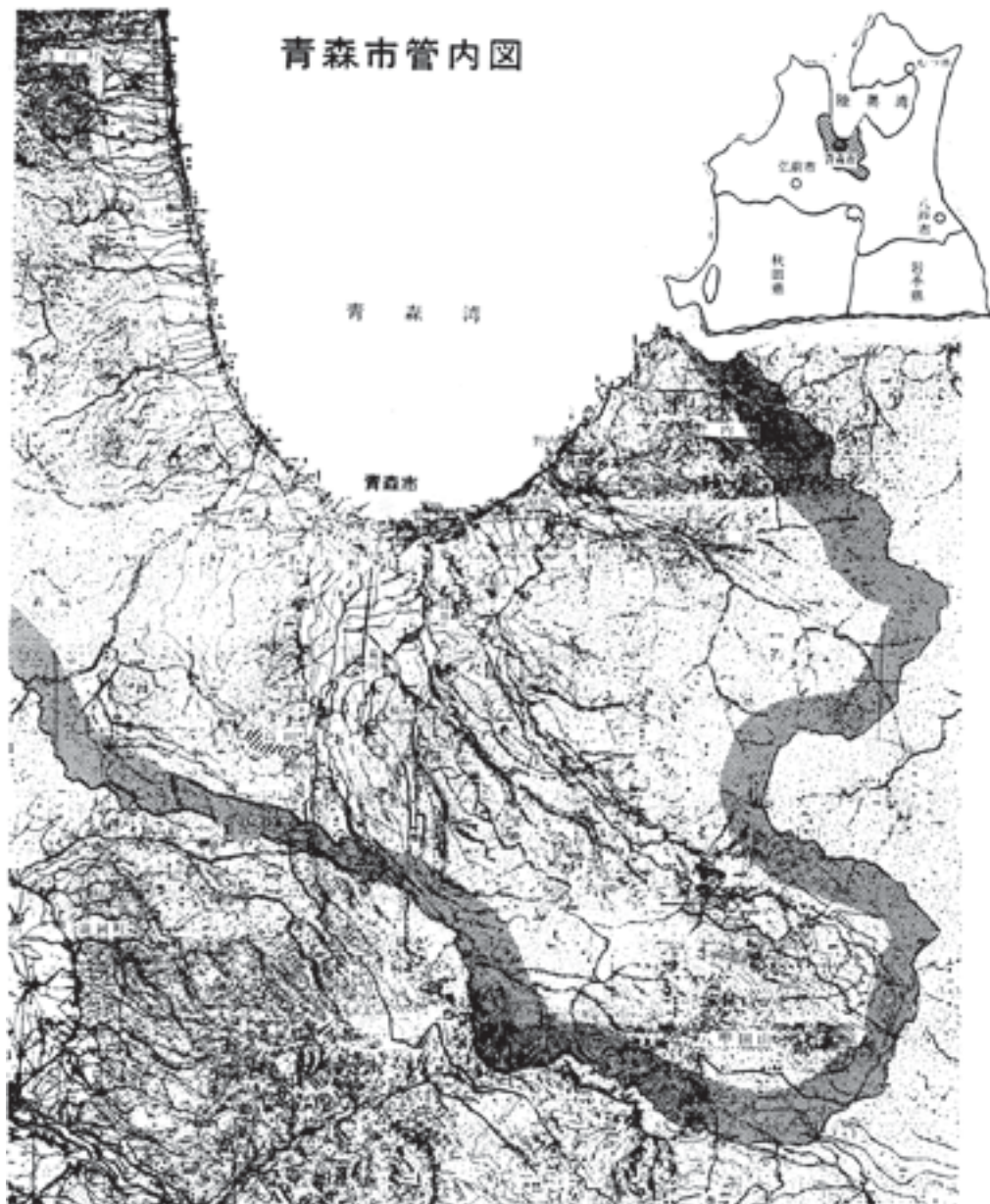
そこで青森市教育委員会では市内唯一の縄文時代晩期の貝塚および歴史時代製塩址である大浦遺跡が農耕、盗掘により、また宅地造成のための埋立工事を行なう計画があるのを聞くに及んで、消滅以前に調査を実施することにし、原始及び古代の生活文化を究明し、記録による保存を図るために、主任調査員に小野忠明、副主任に井上久、製塩址担当調査員に北林八州晴、葛西励、貝塚調査員に三宅徹也、石岡憲雄、塩谷隆正をあて、補助員として市内7高校生約40名で昭和46年7月26日から8月2日までの8日間の記録をここに報告する。

(註)(1)「青森市の遺跡分布図」1972.3.青森市教育委員会

(2)「日本原始美術」1960 講談社、120頁井上久記

(3)「縄文文化遺物集成」1969 大高興

(4)「青森県夏泊半島の製塩土器」1969 考古学ジャーナル 北林八州晴



青森市役所作成

1/200,000

## 遺跡の位置

大浦遺跡は青森市の中心から国道4号線を北東約6km、国鉄東北本線野内駅からは北東1.5km、青森湾に面して鼻線崎がありその西側に位置する。

縄文貝塚は、汀線より50m、海拔1.5～2mでやや傾斜を示めず畑地（青森市野内字浦島246.2上村きよ所有地）である。また白砂式土器出土地点の製塩址は、この貝塚南方150m離れた現汀線より150m海拔1.5mの平坦な畑地（青森市野内字浦島258、川村一充所有地）にそれぞれ所在している。

## 調査経過

### 縄文貝塚

まず、100m<sup>2</sup>を2m四方のグリットに分け、それを各班ごとに発掘して、魚箱5箱の遺物を取りあげたが住居址・炉址のような遺構は認められず、貝層も薄く（写真7）しかも主要部は盗掘による攪乱がほとんどで、海岸に近い方のグリットでは40cm程で地山に達し、標高の高い方のグリットに主眼を置いて発掘を進めた。

人工遺物の90%までは縄文時代晩期大洞C1、C2式土器で、円筒上層式（中期後半）十腰内5式（後期末）の土器も少量出土した。復原できるものはこのうち1個であり、他はすべて破片ばかりである。

精製土器は1割にもみならず、残りは粗製土器片である。石器は、石鏃・石匙・石篋・石錐等であり、骨角器は釣針・銚・錯・銭・装飾品等である。

自然遺物は骨類 鹿・イノシシ・水鳥（種別調査依頼中）マダイ・スズキ・ポラ・メバル等の魚骨。貝類はイボニシ・イガイ・レイシ・カガミガイ・コシダカガングラ。

### 製塩址

ここも100m<sup>2</sup>を発掘して約300点の遺物と三基の製塩土釜を出土した（写真5・6）

白砂式土器、土製支脚・カマド・用器台・古銭（元豊通宝）鉄片・骨片・貝殻等が釜の周辺に散乱、堆積状態を示し、釜の内部からは殆ど出土がみられなかった。（写真3）

（調査員 塩谷隆正記）



## 骨角器（第 図版 第 図版）

### a 刺突貝（1～5）

モリ、ヤスの類が5点出土した。寺脇貝塚の様な索孔やソケットを有する離頭銛および石鏃を押入する刃溝を有するものは発見されていない。1～3は燕尾形の逆刺を有する。いずれも黒色のピッチ様のものが附着しており、固定着柄されたものであろう。1は先端部が欠損してお現存6.8cmを測る。横断面は半弧状を呈し、内部の海綿質が残っている（10）。先端部はこの海綿質をさけ、やや外傾している。胴中部を細くしぼり尾部との境にもう一段の隆起を残しているのは刺突機能を高める逆刺的效果をもたせるものであろう。尾部は（1a）を茎と左に2個、右に1個の逆刺によって構成され、茎は更に切ざみを入れ2つに分けられている。2も先端部を欠損（現在5cm）している。胴中部のつくりは1と同様で、先端部のつくりはやや内反にしている。

尾部は1対の逆刺と茎で構成している。3はおおよそ1、2と同様の形態をもつが先端部が長く尾部には茎をもたない2又は逆刺としている。現存6cm。

4、5は骨製の鏃と思われるが一応一括しておいた。4は全長4.5cmで扁平なつくりである。茎部にピッチ様のものが残っている。5は3.4cmで長円垂形を呈する。基部とやや上部に溝を一周させているが、これは着柄効果の為と思われ、この部分にピッチ様のものがついている。6釣針（7～19、20～23、24）釣針は糸繰部12点、先端部2点出土した。8、9の欠損下端部には切り込みを施しており、組合せ釣針になるかとも思われる。10は欠損断面に縦位の搾孔痕がある。組合せ式には接合部が細く、孔も小さすぎる。釣針としての効果を果すには疑問視される部分である。

先端部のつくりには2種あり、15は内部に逆刺をもち、16は外部に逆刺を有している。11にはピッチ様の附着が残っている。30は垂飾貝とも考えられるが、23と共に釣針の未製品と考えたほうがよいだろう。

以上を概観すれば、a種の大きなもの（7～9、14、21～23）とb種細身のものに分類でき、器種により用途別機能に差のあったらうと推測される。

## C その他の骨角器

その他不明の骨角器、未製品と思われるものや切断痕擦痕を有するものがある。

6は扁平なつくりで、鍵になるものかも知れないが、4、5とは形態が大きく異なる。ヘラ状工具かとも思われるが、下端部のつくりに疑問点が生じよう。

20、28は尖頭器様になっており、モリ、ヤスの未製品とも考えられよう。しかし、一方このままで搾孔具として用いられたものとも考えられる。24は鳥管骨で上下端に切断痕を有する。切断面は整形されておらず、残欠品であろうか。25～27、29、31は切断痕、擦痕を有しているが製作後の残欠と考えられる。

## 遺構について

釜は三基共粘土、玉石、貝殻粉末入り漆食等で築造した大釜で並列し、一号と三号址とが一部重複している。釜の平面は長円形で断面は半円状を呈す大きさは内径2.1×2.5～2.3×2.7mを測る。釜の外周にま土手状の痕跡を残した焼石焼土面が3.7×4.0～4.0×5.0mの範囲でみとめられた。釜の上部構造は数年前のトンネル工事で削りとられ不明である。深さは45～95cmで、内部断層面序は幾分乱れているが弧状を呈している。

調査前、大釜は土器製塩炉(含カマド)と想定したが、釜内部から製塩用大製器具が出土しないこと。内面が半円状でしかも支脚や器台を固定した形跡が認められないこと等から文献上も知られている製塩用大釜と判断せざるを得ないとする。

ただこれらの釜は、白砂式土器製塩跡を整地して築造したと想定される。元豊通宝は土器製塩の下限と土釜製塩の上限を探る上に重要な傍証となると思う。

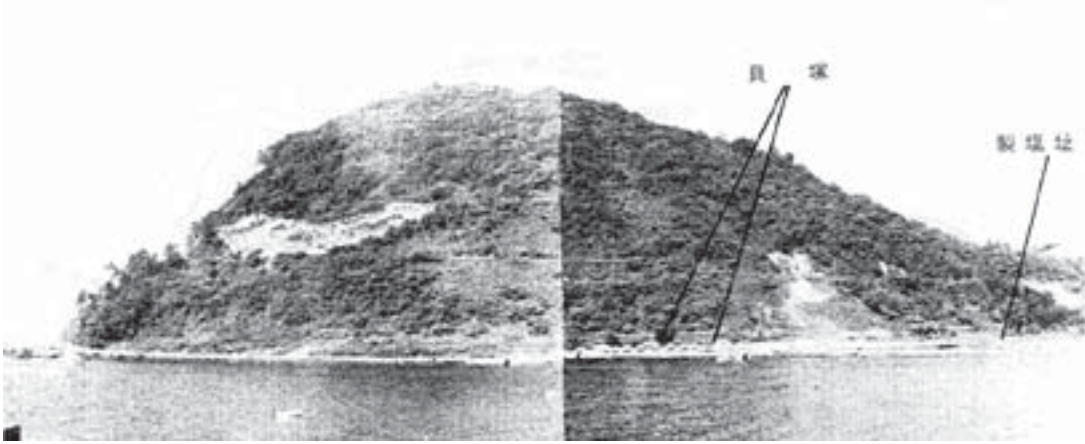
なお文献上当地方最古の製塩は享禄3(1530)年で大釜とみられ鉄釜の移入は元禄15(1703)年以後といわれている。

(調査員 北林八州晴記)



# 拡大図





遺跡全景



製塩址全景



白砂式土器出土状況



支脚出土状況



1号土釜

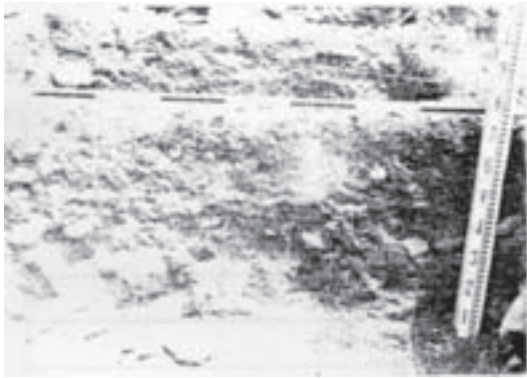




2号土釜



貝塚 発掘状況 (表土剥離)



グリット1の層位 (3層までが包含層)



土器出土状況



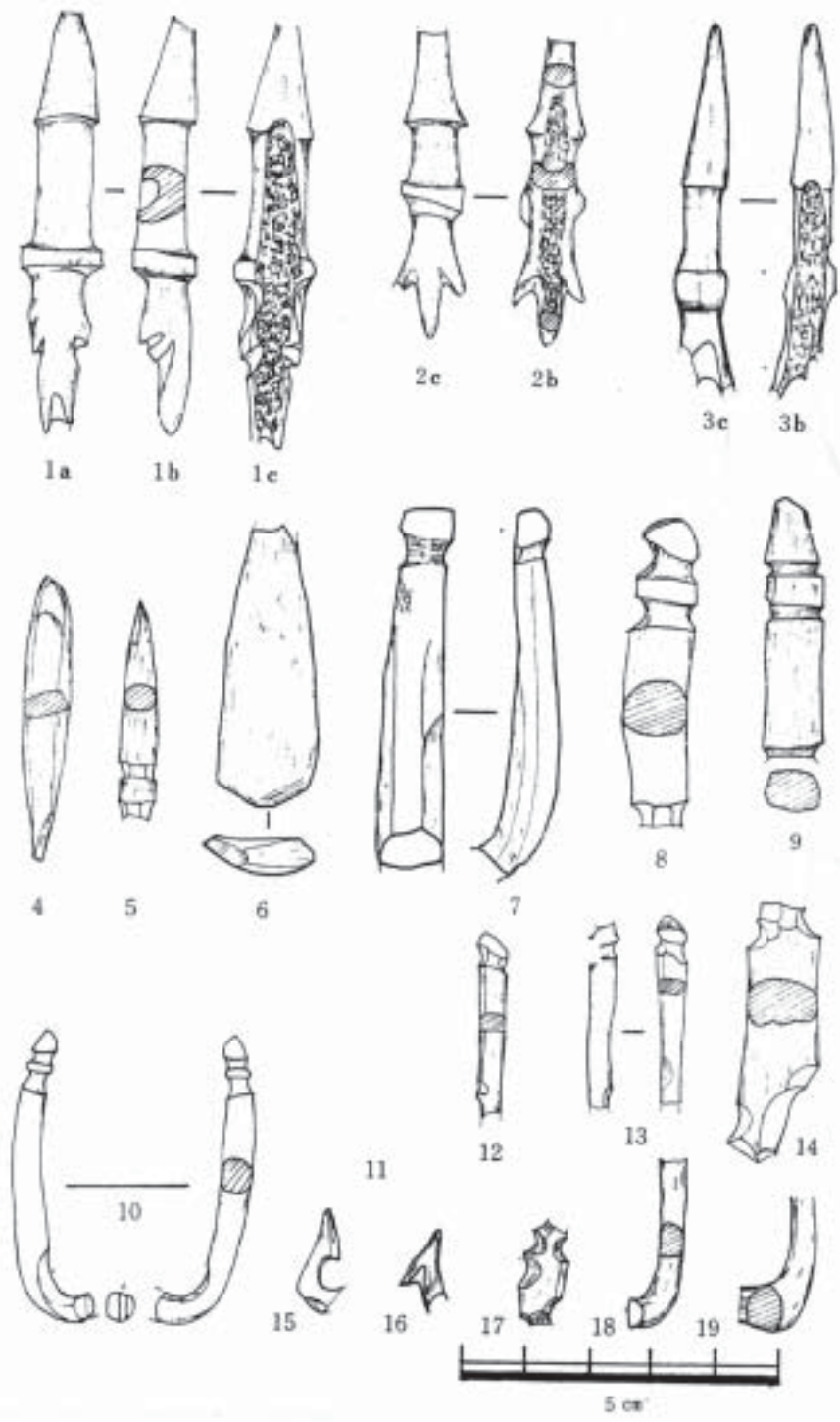
骨鏃出土状況



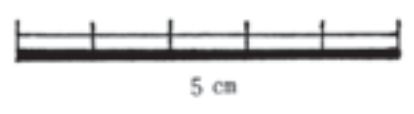
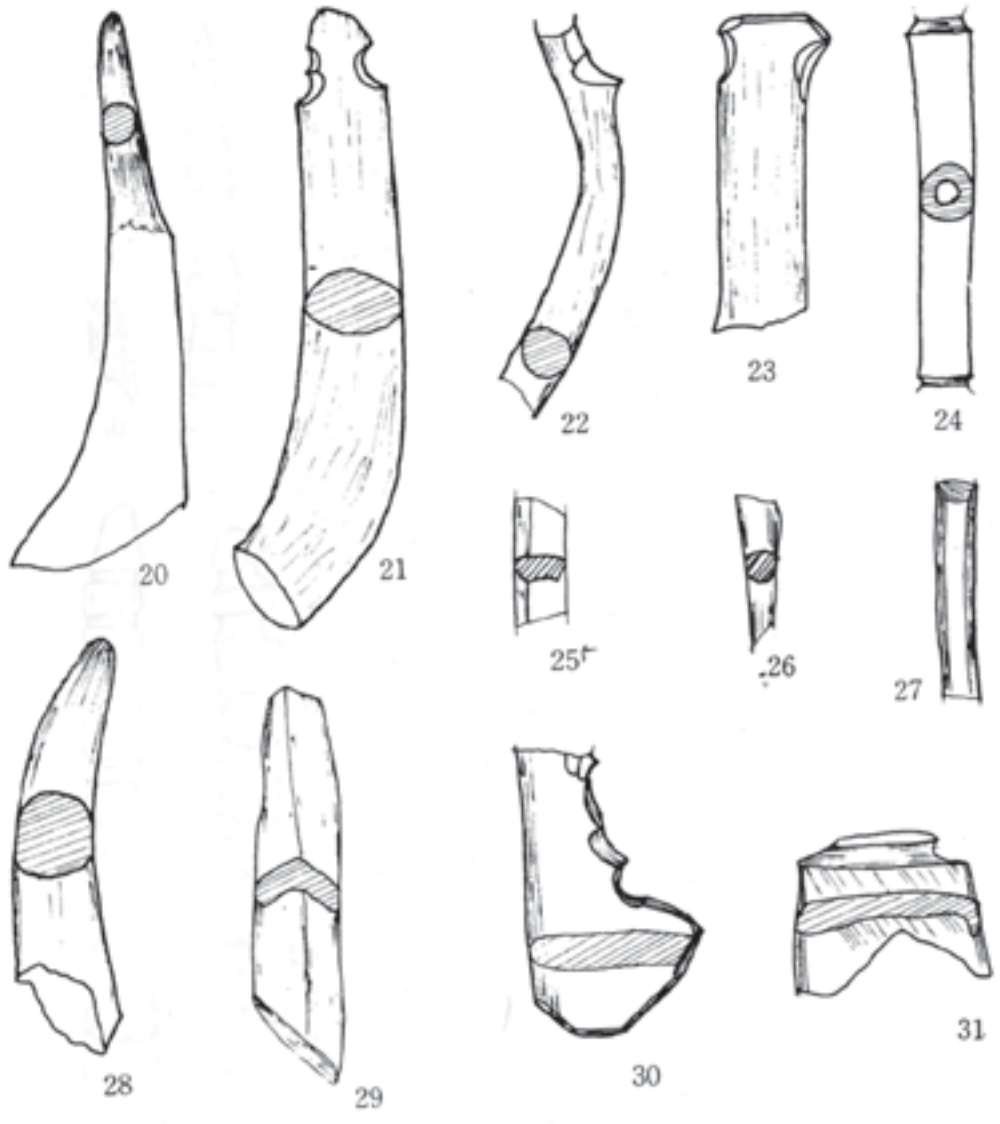
刺突具出土状況

図版No.	台帳 No.	出土グリット	層位	備考
1	上M土			
2	B 8	A 5		鹿角
3	B 41	A 6		鹿角
4	B 38	G 5		鹿角
5	B 42	E 5		
6		C 3	攪乱層	
7	B 11	C 5		
8	B 22	A 6		鹿角
9	B 15	B 6		鹿角
10	B 3	C 5		鹿角
11	B 31	C 5		
12	B 7	C 5		
12	B 7	C 5		
13	B 7	C 5		
13	B 7	C 5		
14	B 30	B 5		
15	B 28	C 5		鹿角
16	B 25	C 5		鹿角
17		C 5	混貝土層	鹿角
18	B 34	B 6		鹿角
19	B 26	C 5		鹿角
20		G 5		7.31日出土
21	B 37	E 5		
22		B 4		7.31日出土
23				不明
24	B 32	C 5		
25		C 5	混貝土層	
26		C 5	混貝土層	
27	B 23	B 3		
28		B 4		7.31日出土
29	B 19	K 5		
30	B 26	C 6		
31	B 33	B 6		

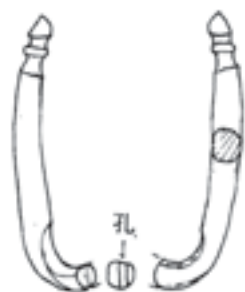
# 实测图 1



実測図 2



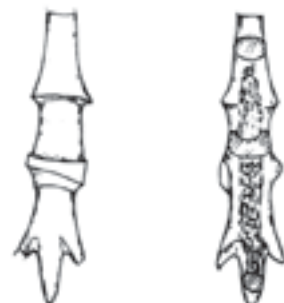
### 実測図 3



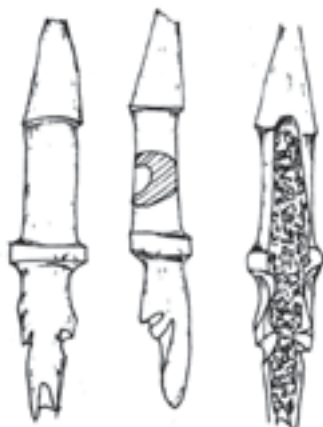
大浦C5区  
混貝No.B3



C5区混貝  
B7



A5区混貝  
B8



表採



C3区  
攪乱層



C5区  
No11



鳥管骨  
C5区No32



B6区  
No15



B3区  
No23



C5区  
No25



C5区混貝土層

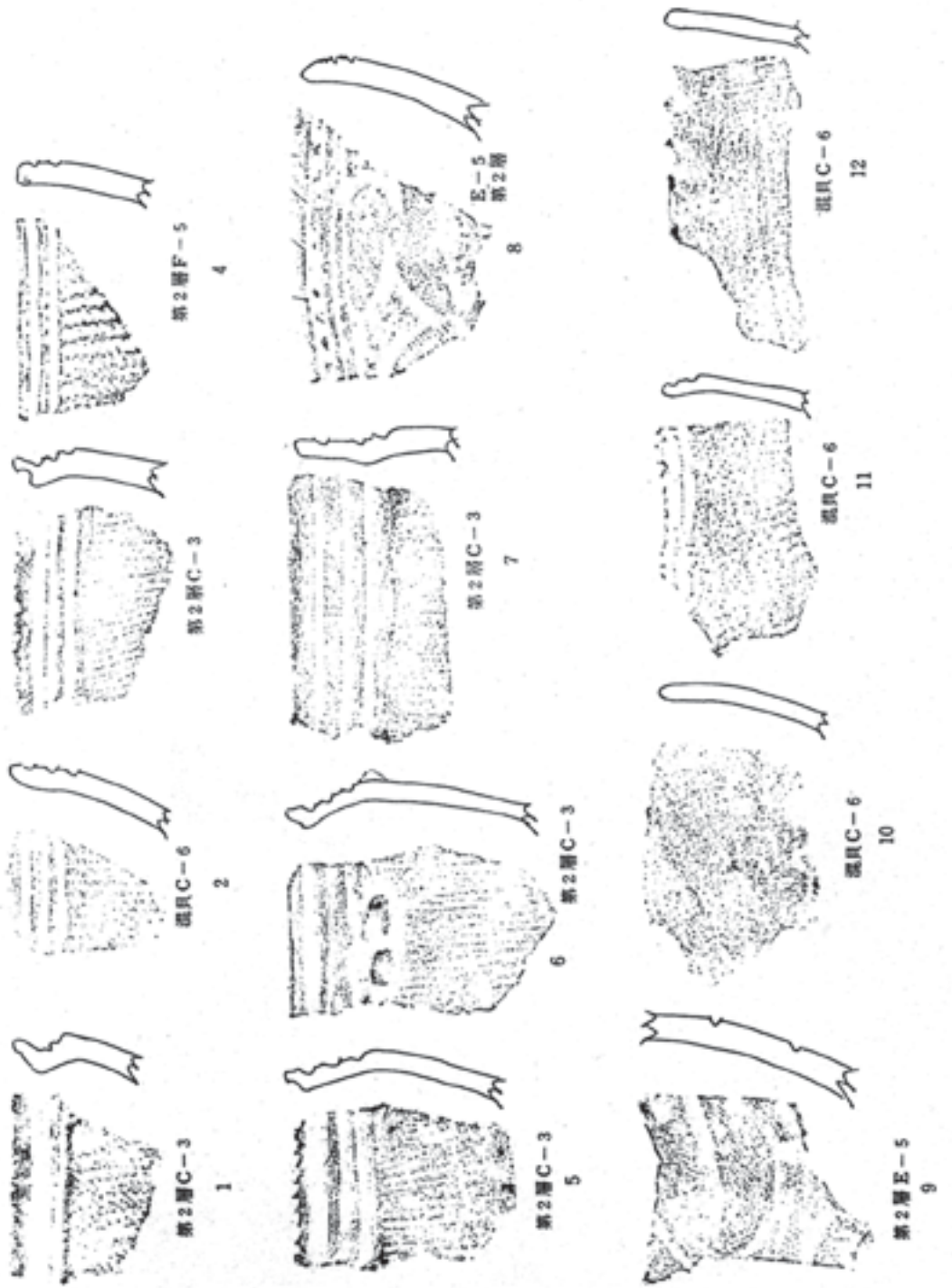


# 実測図4



青森市大浦貝塚骨角器 46. 8.

# 実測図5



# 実測図6



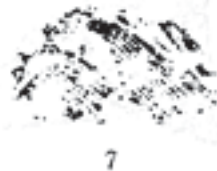
白砂式土器  
口縁部1~4



白砂式土器  
底部5~6



土製支脚  
7~8



青森市の文化財 7  
大浦遺跡調査報告書

昭和 46 年

発行所 青森市教育委員会